

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530625

研究課題名(和文) 職業への距離認知にみる階層/階級的地位の次元構造

研究課題名(英文) Dimensional Structure of the Status in Stratification/Class System in the Cognitive Distance to Occupations

研究代表者

林 拓也(HAYASHI, TAKUYA)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：90322346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：社会的距離とは、社会集団間の親-疎の程度を表す概念である。この研究では、さまざまな職業に対する認知的な距離を測定した上で、その距離構造がどのような要素(次元)から構成されているか、またその距離認知を規定する要因が何であるかを探求する。その主要な知見として、第一に、職業への距離認知の次元構造として、地位/性別職域分離/自律性/営利組織ホワイトカラー 技能職という4次元が主軸であることが明らかとなった。第二に、職業への距離認知の規定要因として、自身の職業属性のほか、協働機会と、私生活上の関係(パーソナルネットワーク)が影響していることが確認された。

研究成果の概要(英文)：Social distance is a concept which stands for the degree of proximity among social groups. In this study, we measure the cognitive distance to various occupations, and then explore what dimensions consist of the distance structure, what factors have effect on the cognitive distance. The main findings are as follows. First, as the dimensional structure of cognitive distance, four dimensions are extracted: status, gender segregation, autonomy, and white-collar jobs in business organization / jobs that require one's skill. Second, the factors that influence cognitive distance are one's own occupational attribute, the opportunity of cooperation of labor, and the relationships in private life (personal networks).

研究分野：社会学

キーワード：社会的距離 職業認知 社会階層/階級 階層/階級意識 計量社会学

## 1. 研究開始当初の背景

社会階層・階級論において、人々の職業は不平等の構造を表す指標として位置づけられてきた。階層論の観点からは、その構造が一次元的な連続性を成す地位としてみなされ、他方、階級論の観点からは、生産手段や雇用契約、労働市場に基づく対立的な関係の構造として捉えられる。各理論について職業間の位置関係として表すと、それは職業同士の距離（非類似性）の大小によって表され、もし階層／階級上の地位が顕著に異なる職業であれば大きな距離、同じ程度の地位の職業であれば小さな距離となる。さらに、こうした距離による位置関係の把握が重要である点として、その距離構造を再現するための主要な次元が、階層／階級に関するどの理論・観点と整合するのかが検証することが挙げられる。たとえば機能主義的階層論の観点は、職業間の距離が一次元で再現可能であり、かつ職業がその次元において連続的に分布することを想定したものである。階級論の観点は、後者が連続的ではなく断絶していることを想定しており、またネオ階級論では前者が一次元ではなく多次元であることを想定している。

他方で、こうした次元構成や区分は、必ずしも人々の階層／階級意識と一致していないことがたびたび指摘されてきた。階層／階級に関する客観的な区分と主観的な地位認知との間に齟齬があることは、後者の認知構造に関する系統的なバイアスとしてしばしば捉えられるが、その観点においては客観的な階層／階級区分が所与のものとして扱われている。しかしながら、人々の認知的側面をより積極的に扱い、それに基づく階層／階級の構造を明らかにする研究視点も存在し、応募者の先の研究はその枠組みに準じて展開したものであった。この視点においては、職業同士が類似しているかどうかを第三者的に評定したデータに基づいて、職業の識別構造を析出することになるが、評定者自身がその次元構造のどこに位置するかについては明らかにすることはできないという限界がある。

## 2. 研究の目的

本研究においては、さまざまな職業に対して人々が有する社会的距離 (social distance) の主観的認知の調査データを得た上で、その距離認知の構造を明らかにする。それを行うことの学術的な特色としては、以下の諸点が挙げられる。

(1) 従来の研究において、自己の地位認知 (階層／階級帰属意識) は、ア priori に設定・ラベル付けされたグループ (例. 上／中／下階層、資本家／労働者／中産階級) のどれに帰属するかを問う形式で導出されてきた。これは階層／階級の理論枠組みに準じた区分を所与としているが、とりわけ日常的に階層／階級を意識しないことが多い日本において、人々の認知がこれに沿っているとは限らない。本研究においては、上記のような所与の区分に依存することなく、人々が認識しているのは自身と職業との主観的な距離関係であるというミクロな認知の前提から出発する点で、上述の研究枠組みとは視点を異にする。

(2) 職業への距離認知は、不平等構造を表す「地位」だけでなく、他の特性も含めた多次元的な構造からなることが予想される。この点を考慮し、距離認知データを次元分解的な統計手法にかけて、主にどのような次元によって人々の距離認知が構成されているのかを明らかにする。また、その中で「地位」次元がどの程度の重要性をもっているのかも、あわせて検証する。

(3) 距離認知の基準は、自分自身の職業的属性だけでなく、仕事上・生活上の関係を有する他者のそれも含まれる可能性が考えられる。このことは、友人や家族・親族との職業的結合に着目した客観的 - 社会的距離 (objective social distance) の研究から示唆される点でもある。また、このような職業的結合は、地位集団 (status groups) を構成し、それは人々の社会意識や行動に影響することがしばしば論じられている。本研究における距離認知は、こうした地位集団に対する親

近性やアイデンティティを表す指標と位置づけられることから、それがどのような要因に規定されるかを分析することにより、地位集団の主観的認知の特性を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 調査設計の検討を行った後、質問項目の妥当性を確認するために、小規模のプリテスト（予備調査）を行った。調査方法は、回答者がインターネット上で回答する Web 調査により、2012 年 11 月に実施した（第 1 回予備調査）。調査対象者の属性は、20～59 歳の有職者とした。実査は専門業者に委託し、まず本人の従業形態と職種のみを尋ねる「スクリーニング調査」を行い、その中から、指定の職業区分（3 区分）および性別区分（男／女）ごとに一定数の回答者に調査依頼配信を行うという手続きをとる。その結果、計 210 ケースのデータを得ることができた。このデータを用いて、評定職業に対する認知距離をはじめ、イメージ評定・関係性を中心とした分析を行い、本調査を実施するにあたっての注意点や修正点などが無いかを検討した。その結果、本研究において最も重要な項目である「認知距離」の測定において、回答の偏りが大きく、当該設問の変更が必要であることが判明した。

(2) 上記の予備調査において修正が必要であると判断された回答の偏りに対する対処、および提示する職業名の改変が妥当であるかを確認するために、小規模のサンプル（207 ケース）を対象として、2013 年 5 月に第 2 回目の予備調査を実施した。これによって得られたデータを分析することを通じて、上記のチェックを行い、より大規模なサンプルを対象とした本調査を行うことが可能であると判断した。

(3) 第 2 回目の予備調査の設計をふまえ、2013 年 11 月に本調査を実施した。まず職業属性のみを先行して尋ねるスクリーニング調査を実施し、28,468 ケースが回収された。次に、性・年齢・職業グループによる本調査

配信対象の人数割り付けを行い、あらかじめ設定した各グループの回収目標数（合計 2,000 ケース）に達するように配信を行った。結果として、A 票 1042 ケース／B 票 1027 ケース、合計 2069 ケースが有効回答として得られた。

(4) 回答として得られた情報のうち、本人および父親（または保護者）の職業・産業に関する自由記述回答については、あらかじめコード化が必要になるため、(1)東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターの協力を得て【注】、コードの候補を絞り込んだのち、(2)候補となるコードに基づいて、最終コードを確定させる作業を、アルバイト大学院生の協力により実施した。

【注】職業・産業情報のコーディングに当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターが提供する自動コーディングシステムを利用した。

(5) 調査により得られたデータに基づいて、「2. 研究目的」に沿った計量分析を行った。

### 4. 研究成果

(1) 予備調査に基づいて、試行的な分析を行った結果、人々の距離認知を構成する主要な軸として、「地位」・「性別職域分離」・「ホワイトカラー／ブルーカラー」などが確認された（図 1）。

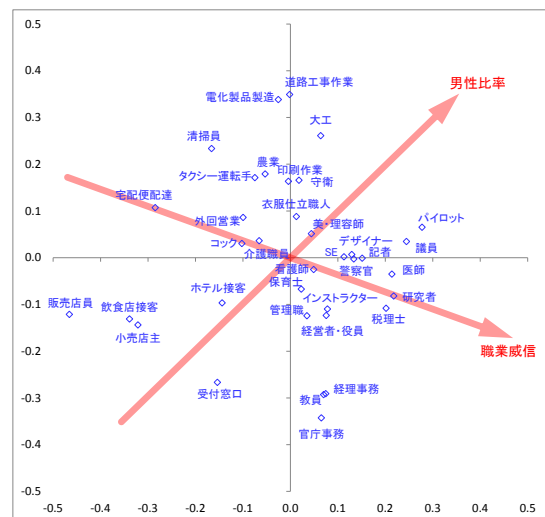


図 1 距離認知 2 次元空間における職業布置

この結果については、「5. 主な発表論文等」の雑誌論文（「認知的側面からみる職業の社会的距離 —研究の潮流と試行的分析—」）にまとめられている。

(2) 本調査のデータについて、回答者の基本属性（性別・年齢・職業属性）、評定対象とした36職業への距離認知・職業イメージ・職業選好を中心とした基礎集計を行った。そして、その集計結果をまとめた簡易版の速報（10ページ）を、回答した人の中の希望者に対して配信した（図2、図3）。

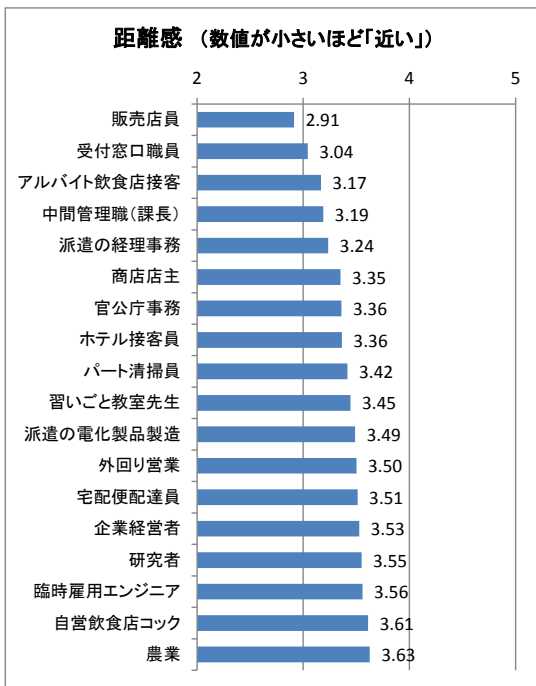


図2 職業への距離感

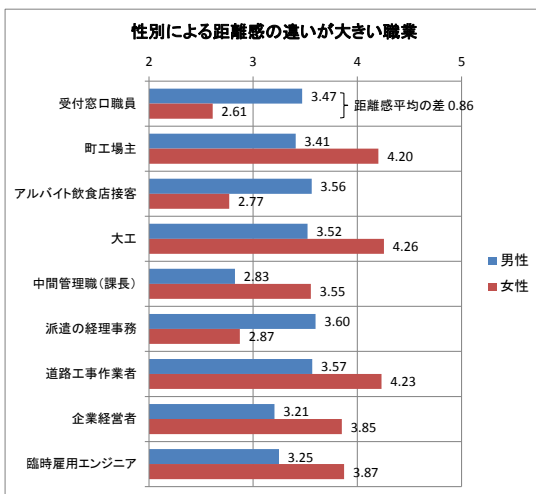


図3 性別による距離感の違い

この結果については、ホームページ上でも

公開した（→「5. 主な発表論文等」：奈良女子大学学術情報リポジトリ「職業イメージに関する調査：調査結果の速報【回答者向け】」）。

(3) 学術的なインプリケーションについて、日本社会学会第87回大会（於神戸大学）において、口頭発表を行った。主な報告内容は、(1)職業への距離認知の次元構造として、地位/性別職域分離/自律性/営利組織ホワイトカラー — 公共職・技能職という4次元が主軸であること（図4）、(2)この次元空間と対応する職業群は9クラスター（高威信専門職/上級サラリーマン/非熟練/マニュアル/対人サービス/医療福祉/一般事務/公職/裁量労働）にまとめられること、(3)職業への距離認知の規定要因として、自身の職業属性のほか、協働機会と、私生活上の関係（パーソナルネットワーク）が影響していること、などである。

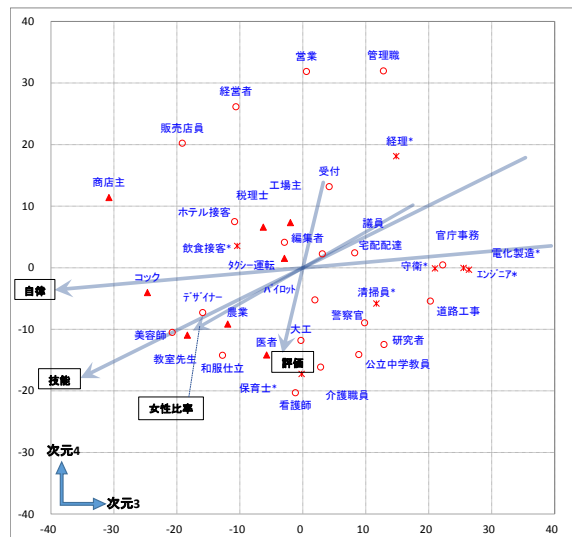
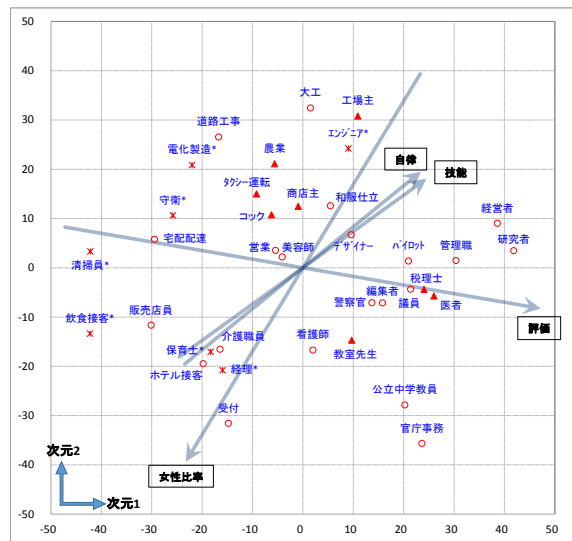


図4 距離認知の4次元構造

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①林拓也、「認知的側面からみる職業の社会的距離 —研究の潮流と試行的分析—」、『奈良女子大学社会学論集』(査読無)、第21号、2014年、19-33頁.

[学会発表] (計2件)

①林拓也、「職業への距離認知に関する計量分析(1) —距離認知の次元構造—」、日本社会学会 第87回大会、2014年11月22日、於神戸大学.

②山本圭三、「職業への距離認知に関する計量分析(2) —距離認知に対する共同性の影響—」、日本社会学会 第87回大会、2014年11月22日、於神戸大学.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

・林拓也「職業イメージに関する調査：調査結果の速報【回答者向け】」奈良女子大学学術情報リポジトリ、2014年6月3日公開  
(<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/3627>)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

林 拓也 (HAYASHI, Takuya)

奈良女子大学・研究院人文科学系・准教授  
研究者番号：90322346

(2)研究分担者

——

(3)連携研究者

山本 圭三 (YAMAMOTO, Keizo)

摂南大学・経営学部・講師

研究者番号：20612360